

解題

小池淳一

本書は先に刊行された『生き物と食べ物の歴史』（高志書院、二〇二一年）に続いて、塚本学先生（以下、敬称を略す）が遺した単行本未収録の論文を集めたものである。初出は別に掲げるので、その補足および各論文の特徴と背景、位置づけを述べて、解題としたい。

塚本学は『生類をめぐる政治―元禄のフォークロア―』（平凡社、一九八三年、のちに講談社学術文庫、二〇一三年）を代表作とする日本の社会史研究の牽引者のひとりとして知られる。本書は、そうした研究の基盤を構成する論考を集めている。塚本史学の基盤として注意すべきなのは、史料への沈潜に裏づけられた地域における生活史への持続的な関心であり、それは大学に進学する以前、旧制高校在学時からの柳田國男への傾倒によって側面から支えられていた。また一九八三年に信州大学人文学部から国立歴史民俗博物館へ転じて以降、博物館・歴史民俗資料館等における歴史研究の意義とそれを支える史資料（文化財）についての提言をくり返し行なっていることも見逃せない。本書ではそれらを「Ⅰ 歴史研究と民俗」「Ⅱ 地域史の視点」「Ⅲ 博物館の可能性」の三つに区分して、発表年順に配列している。

通読していただければわかるように、これらの思考の軌跡は別箇のものではなく、相互に関連し、支え合い、つながりあっている。本書では民俗、地域、博物館をキーワードとして、思い切って区分し、配列してみたことを確認し

ておきたい。収録にあたっては原則として初出のままとし、注記や参考文献のあげ方などについて全体を通しての統一はあえて行なわなかった。ただし、事実関係の誤りや誤植の修正、そしてごく一部、論旨を明確にするために言葉あるいは句読点を補った部分がある。また、各論考のなかで本書に収録した別の論考に言及している箇所には、本書に収録されていることを付け加えている。以下、各論考について注目すべき点を述べていこう。

「Ⅰ 歴史研究と民俗」は六編を収録した。

「近世史研究と民俗学」は、徳川林政史研究所で塚本が行なった近世史研究において民俗学的手法の有効性を考える趣旨の報告に基づいて書かれた。近世史研究の立場から民俗学の視点を生かすことを意識し、それをめぐる問題を具体的に指摘する。民俗学をふまえた歴史研究の総論ともいうべき論考である。前半では村落共同体の武力とその表れとしての法を糸口に論が進められ、後半では、研究とその基盤にある意識として、近世を近代と対比し、そこに見られるイメージや意識を、明るい／暗いに二分してとらえることで、その先に導かれる歴史像を論じていく。歴史研究と民俗研究とが協業することにより豊かな歴史像を追究していく可能性と必要性を説いている。

この論考は、塚本が大学の講義や学会・研究会で繰り返して論じてきた問題をベースに学際的な協業を志向したものと見える。民俗学の諸分野と歴史研究との対応ではなく、生活を構成し、維持していく人びとの知恵としての民俗を通時的にとらえることが塚本の基本的な姿勢であった。末尾の「単純な事実への探求欲、知的関心といったものをつめていくことと、人生そのものへの真剣なとりくみとは、どこかで接触するものではなからうか。」という言葉は塚本史学の基本的な姿勢を示すものであろう。なお、ここでは後に「土農分離と呼んでみたら」（『信濃』五六巻一―号、二〇〇四年）で提示された兵農分離が実体を離れた概念であることの指摘が既に示されていることにも注意しておきたい。

「歴史と民俗との共同の学の課題」と「権力と階級をめぐって」は国立歴史民俗博物館における共同研究「日本民

俗学方法論の研究」(一九八六～八八年度、代表・福田アジオ)に参加しての成果であり、前者は『国立歴史民俗博物館研究報告』第二七集(一九九〇年)に発表された。政治権力と民俗との関係を支配層の文字知に代表される知識と生活のなかの知恵の連鎖に見出し、その具体的な姿を医療を素材に考えようとしている。

後者では「権力」や「階級」——塚本はこれに代えて「階層」を用いることを提起している。——といったおおよそ、民俗学が意識して捨象してきた語を表題とする。前者もそうだが、『生類をめぐる政治』の著者は、ここで「政治」を国家ではなく、生活のなかの問題としてとらえ、民俗との関わりを考えていくことを主張している。末尾近くに表示された「日常生活への関心のなかから人類の社会と文化とを問いただしていく仕事」こそが、塚本の志向した歴史研究であっただろう。発表されたのは國學院大學で折口信夫の民俗学を意識、継承する志向のもとに編集刊行された『日本民俗研究大系(第一巻)方法論』(一九九一年)である。この講座は同書の編集委員会編とされているが、第一巻の担当は、倉石忠彦・坪井洋文・野村純一である。

「民俗史料と歴史学」では物質や口頭伝承、社会関係といった民俗資料を、歴史をとらえるための材料、すなわち史料としてとらえ、利用していく際の基本的な認識について論じている。歴史学の立場から民俗学の個々の成果だけではなく、その認識基盤までをふまえて新たな歴史研究の地平を拓こうとする強靱な思考をここから読み取ることができるだろう。

こうした塚本の思索を支えていたのが、長年にわたる柳田國男への傾倒であることを示しているのが『木綿以前の事』への思いである。論文ではないこの文章をここにあって取めたのは、この歴史家が、研究の根底で、柳田の著作を深く真摯に受け止め、個々の課題だけではなく、その思考の枠組みとして対話をくりかえしてきたことを確認したかったからである。若い日に感銘を受けた読書の記憶の叙述にとどまらないことに注意をむけてほしい。

なお、研究会での報告とそれに続く討論記録のかたちで発表されたために、塚本個人の論考として収録することを